

これからの林業試験・研究の方向

弓 田 謙

去る4月の異動で渡辺前場長のあとをうけ、林業・林産業が極めて深刻な事態にある中で林業試験場長を拝命したが、責務の重大さを改めて自覚するとともに、試験研究という立場から、今日の情勢打開にどのようにアプローチすべきか、模索の段階である。

林業の試験研究は、病虫害対策など突発的な事象を除いては、そのとり組みは時間との闘いであるだけに長時日を要するのが通常であろう。しかし、林業行政をとりまく環境なり、ニーズが時々刻々の変化を示し、その速やかな対応を求める場合が多くなっている事情を考えると、自然科学の分野とはいえ従前の延長のみにとどまる試験研究の進め方では限界があることが痛感される。

もちろん、開拓以来ようやく100余年の歴史の中で、本道の天然林については、まだまだ未確認の分野も多いし、主として戦後30余年に大量集積された人工林についても技術的に定着させえない部分も残っている。

したがって林業技術の基礎的な部分については、今後とも早期解明に全力をあげなければならないが、問題は1. 早く、2. 良いものを、3. 安く、という育成林業のニーズにどのようにこたえてゆくかである。これらのニーズは、林業経営の範疇においては、所有の大小に関係なく、また会社有、個人有の区別なく共通の願いであろうし、一方、水源涵養林、海岸林など公益性の強い森林では、1. 早く、2. 確実に、成林する技術の定着を求めている。

林業には、育成期間が超長期という宿命を背負っており、試験研究の段階でも長期にわたる観察、考察を必要とする場合があるが、国立、公立等各試験研究機関の相互分担、場内部の連携プレー、既存資料の高度活用などで、時間短縮の方途も見出せるのではないかと考える。

また道産広葉樹に代表されるように、良質材の生産を望む要請は今後ますます強まることは明らかであり、材質育種も含めて地域の特性にあった育成樹種の選択、更新方法などの解明も急がねばならないと考える。そのためにも、林産試験場との連携を一層堅密にし、育成段階の試験研究の成果を加工面で検証する機会を多くすべきものと思う。

さらに近年、農山村を給源とする山林労働者の減少傾向や、事業箇所那点地化、散在化に伴う事業コストの上昇などから、効率的かつ省力化された施業技術の確立、作業仕組みの合理化などは、今後重要な課題となることが予測されるので、その分野の試験研究も必要となろう。

産業振興の中で科学技術の受けもつ役割は重くかつ大で、試験研究の成果を企業や土地所有者に早期に普及指導することは、公立の試験研究機関としては絶対の要件であり、全職員の広い習を結集し、輝かしい明日の北海道林業の創設のために全力投球をしなければならないと考える。

(場 長)